豊田市矢作川研究所　月報

Ria

11
2004 November
No.79

CONTENTS

◆矢作川の宝物 クロダカワニナ～存亡の危機にある準絶滅危惧種～
◆いたぞ生き物が！
◆文学作品に描かれた隅田川の水辺景観-過去の河川環境を探る-
◆今月の調査風景
◆今月の一枚
◆編集後記

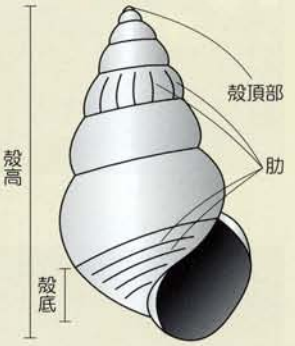
URL http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/

矢作川の宝物

クロダカワニナ

～存亡の危機にある準絶滅危惧種～

澤谷　久美子



皆さんはカワニナをご存知ですか。カワニナは長円錐形の巻貝で、水深が浅く流れが緩やかな場所を好み、河川や用水路などの砂や石、泥などが溜っている所に生息しています。軟体を外に大きく出してシャクトリムシの様に伸び縮みさせて移動します。

カワニナは雑食性で、生息場所によって主とする食べ物が異なり、底質が礫で日当たりの良い場所では珪藻類や枯れて腐りかけた葉や草を、日当たりが悪く珪藻類が少ない所や底質が泥状の場所では、腐りかけた葉や草を食べています。春から秋まで活発にこれらを食べながら成長し、冬季は川底の石の下や泥の中などに潜ってじっとしています。

殻は一般に細長く殻頂部は欠けていることが多く、表面は暗褐色の厚い皮で覆われています。しかし、地域変異や個体変異が著しく、同じ種類でも流速の速い上流域にいるものは体層が発達し太く短いものや、表面がひだ状に盛り上がっているものからまったく平滑なものまで様々です。カワニナは集団生活者であり、生活環境が整っていれば足の踏み場もないくらいの群集をつくることもあります。

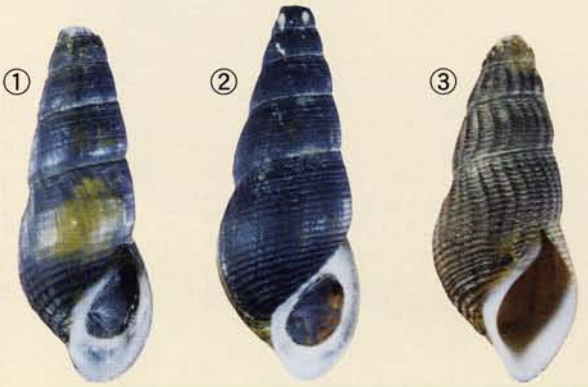
愛知県内に生息しているカワニナ科貝類はカワニナ、チリメンカワニナ、クロダカワニナの３種類です。先日、矢作川の平戸橋でカワニナの調査をしたところ、クロダカワニナを採取しました。クロダカワニナは日本固有種で東海地方から中国地方東部に分布し、上記３種類の中で最も下流側に分布しています。成貝は殻高25～40㎜で45㎜に達するものもありますが、カワニナやチリメンカワニナよりやや小型で、殻底の肋が強くその数は６本程度です。

愛知県内の河川下流域ではほとんどの場所で生息環境が悪化しているのでクロダカワニナの生息が少なく、愛知県では準絶滅危惧種にランクされています。県内における生息場所はわずかしかないとされ、平戸橋で見つかったのは初めてだと考えられます。

このように、貴重なクロダカワニナの種の存続のためには河川下流域の環境保全が必要不可欠であり、こんなに素敵な宝物を損なってからでは手遅れなのです。まずは一度自分の足で川辺を歩いて見ませんか。そうすれば川が身近なものに感じられ、川にゴミを捨てることがとても恥ずかしいことだと感じるでしょう。クロダカワニナが生息するこの自然環境を次の世代へ残すことは私たちの義務だと思います。

（さわたに　くみこ、愛知みずほ大学　人間科学部）

どれがクロダカワニナかな？



答えは4ページです

いたぞ生き物が！

中田　良政

シジミ

メダカ

家庭排水

先回５月号で、豊田市の長田川には生き物がいなくなったと書いたが、いたいたシジミが・・・。その発見に至るまでのことを少し書いてみたい。ここにはザリガニはいるが他の生物はほとんどいないと思っていた。

５月の連休明けに岡崎の友人の家に行った。そこには60㎝の水槽２個と30㎝の水槽１つに、キクモと共に多くのメダカがいた。増えすぎてしまったので捕ってきた池に返すという。それでは分けてくれと頼むと50匹以上を貰うことが出来た。昔金魚を飼っていた水槽を物置から出してきて、園芸用に用意していた矢作の砂を入れ、キクモを植えて準備をし、メダカをいれた。メダカだけでは寂しいので御船川からドジョウとタニシを捕ってきて入れた。ペットショップで買ったバイカモを入れて我が家の水族館完成である。

ところが50匹以上入れると多すぎて、あまりにも混みすぎている。そこで思い出したのは魚の泳いでいる姿が見られない長田川のこと。我が水族館の半分ぐらいを長田川に放流することにした（チョット自然界を壊しているのかな）。

ところが小さい川とはいえ、30匹ほどでは見てもどこにいるのか分からない。追加で岡崎に貰いに行き、また放流してみた。畝部の野川からはフナとモロコとメダカの稚魚を捕ってきて放流してみた。６月頃見に行くと群れているのが確認できた。でもたくさんのドジョウが死んだり弱ったりしている。水田の農薬のせいなのか？７月の朝見に行くと、なんとカルガモの親子３羽が川の中にいた。カラスやサギはいたのだが、カルガモが来ていたのには驚いた。フナやメダカを捕りに来たのだろうか？

８月の暑い日にホームエキスポ横の橋の上から川をのぞいている母娘がいた。『何かいる』と言う、100ｍほど上流に放流したのが群れているのだ。最近キクモも繁殖している。どんな状況か川に入ってみた。砂の厚さは厚いところで５㎝ほどか、所々コンクリートが表に現れている川である。ところがその少ない砂の中に冒頭に書いたシジミを発見したのである。チョット驚きである。どこから来たのか？前からいたのか？謎である。

今の心配は、枝下用水の水が止まってしまうこの先のことである。長田川の水源は枝下用水がほとんどでありこの先は家庭排水とにじみ出ている少しの地下水だけになってしまう。今でも５㎝ほどしかない水深である。メダカさん上手くこの冬を越してください。そういえばメダカはいるがフナとモロコは確認が出来ていない。そしてこの川の残念なのは川沿いの道を散策が出来ないということである。各々の店と駐車場の間に橋があったり物が置いてあったりで、通せんぼになっている所が何カ所もある。小魚のゆりかごの田とその用水を見直す施策は出来ないものでしょうか？

（なかた　よしまさ、矢作川天然アユ調査会）

文学作品に描かれた
隅田川の水辺景観
―過去の河川環境を探る―

谷口　智雅

東京の川の手を流れる隅田川は、芥川龍之介や永井荷風、田山花袋などの文豪たちに書かれた文学作品中にその様子が良く描かれます。例えば、滝廉太郎作曲・武藤羽衣作詞で有名な「花」も明治時代の隅田川の様子を唄っており、舟が往来する様子や墨堤に桜や柳が植えられその美しい風景を浮かび上がらせてくれます。文学作品中の風景描写は当時の情景がよみがえるだけでなく、過去の河川環境も理解させてくれます。

隅田川吾妻橋から見た墨堤桜

文学作品中から昔の環境？少し不思議に思われるかもしれませんが、芥川龍之介の少年時代や隅田川の様子を綴った『大川の水』（1914年発行）の中に、「自分が子供の時に比べれば、川の流れも変わり、蘆荻の茂った所々の砂洲も、あとかたもなく埋められてしまったが、（中略）岸の柳の葉のように青い川の水を、いまも変わりなく日にいくたびか横切っているのである。」とあります。また、同じ作品の中で「銀灰色の靄と青い油のような川の水と‥‥。」「川と川とをつなぐ堀割の水のように暗くない。」と記しています。前述の文章から、大正初期には作者の幼年時代である明治後半に比べ、岸辺の様子は変化したが、川の水自体はあまり変わっていないことが推定できるでしょう。しかし、川の色を表現した後ろの文章に注目すると記述から顕著な水質汚濁はないが、水質の悪化は進んでいると判断することができます。また、田山花袋著の『東京近郊一日の行楽』（1921年発行）には、「しじみは、昔は川で沢山とれたものだが、今では川のしじみは小さくなって、そして油臭い。」と隅田川の向島付近について書かれた文章が見られ、大正時代には隅田川がすでに汚染され、生物相が変化していることがわかります。永井荷風の『日和下駄』（1915年発行）の中には、「隅田川は云うに及ばず、神田のお茶の水、本所の竪川を始め市中の水流は、もはや現代の吾々には昔の人が船宿の桟橋から猪牙船に乗って山谷に通い柳島に遊び深川に戯れたような風流を許さず、また釣りや網の娯楽も与えなくなった。」と記されています。この頃には東京市内の河川での釣りは困難であり、川が汚れて、魚が棲めなくなっていたと理解することができます。

このように、過去の様子がわかるのです。今回は昔の隅田川の様子を見てきましたが、普段何気なく読んでいる文学作品だけでなく、身近にある河川の昔の情景を思い浮かばせる文章を探してみてはいかがですか。

聖路加ガーデンから眺める隅田川河口

（たにぐち　ともまさ、
立正大学地球環境科学部地理学科非常勤講師）

今月の調査風景

9月18日(土)～20日(月)

新潟大学で開催された日本陸水学会に参加してきました。「陸水におけるLTER(直訳：長期生態系研究）の可能性」と題して行われた自由集会では、世界的に広まりつつあるLTERを日本の河川や湖、またそれらを取り巻く生態系全般について行ってはどうかという提案がなされました。多くの研究者が長期的かつ総合的に研究を行うことは必要であると認識しているものの、その困難さばかりがクローズアップされてしまい、消極的な意見が多かったのは残念でした。現在、研究所でも長期的に何を目指し、研究を進めていくべきなのかを話し合っていますが、日本で唯一の川の研究所として、長期的な河川生態系の変化を捉える研究が出来ればと思います。

（白金）

9月24日(金)

研究所セミナーに東京大学愛知演習林の蔵治先生をお招きして、「水源税・水源基金による森林の緑のダム機能強化の実態と将来展望」について発表して頂きました。観念的に扱われることの多い緑のダムの効用を、過去のさまざまな研究事例から科学的にわかりやすく紹介されるとともに、各地の水源基金の施行状況と課題についてお話し頂きました。多数の参加者が訪れ、熱心に質問していました。

（洲崎）

9月26日(日)～27日(月)

矢作川中流域で発生を繰り返しているカワシオグサの発生抑制対策を講じるには、その生活史を解明することが重要と考えています。カワシオグサの培養を始めるため、藻類培養の手ほどきを受けに、長崎大学環境科学部の飯間先生を訪問しました。培養には培養液の調合、滅菌など慣れない作業に苦難を伴うと思いますが、カワシオグサの新たな発見も期待されます。

（内田）

今月の一枚

足助町飯盛山にて
（2002年11月19日　吉鶴靖則 撮影）

編集後記

朝夕が随分と冷え込んでいるようです。皆様、お風邪など引かれませんようご注意ください。私はもう手遅れです。げほげほ。（高橋サ）

どれがクロダカワニナかな?の答え　①　左から：クロダカワニナ、カワニナ、チリメンカワニナ

豊田市矢作川研究所
〒471-0025
愛知県豊田市西町2-19　豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860　FAX 0565-34-6028
E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

Rioは再生紙(100%)を使用しています。